防災・復旧・復興とは何か

～阪神・淡路大震災の経験を通して～

NPO法人阪神高齢者・障害者支援ネットワーク
理事長　　黒田　裕子

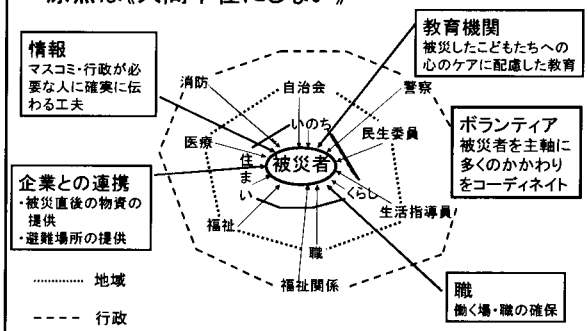
復興とは何かを考える委員会　2010.9.18

何故、復旧・復興に関心をもったか

- 仮設住宅での4年3ヶ月、24時間体制で住民と向き合う中で考えさせられたのがきっかけである
- 高齢者が非常に多く、以後の日本の高齢社会を先取りしていた（47・4%）
- 認知症の増加（3ヶ月で10倍）
- 家族関係が希薄になり高齢者は悲嘆にくれていた（息子・孫が来なくなった）
- 閉じこもり・うつ状態が増加となった（生ききる力を失う）
- コミュニティーの破壊となり、脆弱な社会背景があった

黒田が考える復興とは（1）

原点は《人間不在にしない》



黒田が考える復興とは（2）

- 復興の主体は
  被災者であり被災地
- 復興の目標は
  時間軸によっての立案
  災害サイクルによっての立案
- 継続的な復興は「寄り添う」
  生の声→分析→行動

復興の目標は

- 固有性を尊重し、価値観を認め合う
- 手を出さず、言葉を添え、耳をすませ、共有し、協働する
- 補完性の原理に基づき「自立」と「共生」（自治組織）を守る

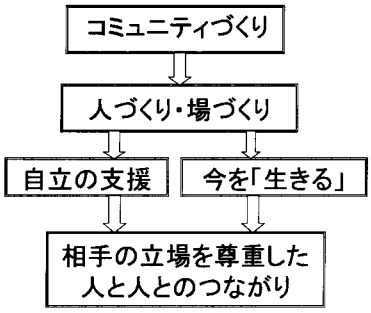
復旧・復興に向けての対応策とは

コミュニティ・支えあいの構造を確立しておく

場の提供（自助・共助）
場を通じて、助け合いと支えあいの関係性を創出し、仕組作りを提供する

固有性を尊重した仕組を構築する

いつの時期においても場づくりと人づくり



西神第7仮設住宅　＜1060世帯　1800人＞

仮設住宅支援

支援活動の3つの目的

①孤独死を出さない
②寝たきりをつくらない
③仮設住宅を良好なコミュニティにする

仮設住宅での実践

- 1060世帯を個別に訪問→ニーズを抽出
- 固定チームで段階別訪問
- ふれあい喫茶　6日／週運営
- 健康・生活・なんでも相談
- 2ヶ月ごとの大イベント
- グループハウス開設
- 行政・消防・警察・福祉関係・地域見守り・ボランティアの連携会議の開催（毎月）→現在も地域に運営されている
- ふれあい喫茶を通して、ミニデイサービスを実施
- 近隣自治会、学校、幼稚園、企業への働きかけ

仮設住宅における看護の視点

＜くらしの再建＞
1) 仮設住宅に居住（2～4年）
2) コミュニティの再構築
3) 環境的側面の再構築（人間関係・暮らし）
4) 「医療」「福祉」「保健」の連動性
5) システム・制度の見直しの強化
6) ネットワークの重要性の強化

＜一人の人としての「いのち」を重んじるために・・・＞

「くらし」と「健康」の連動とは

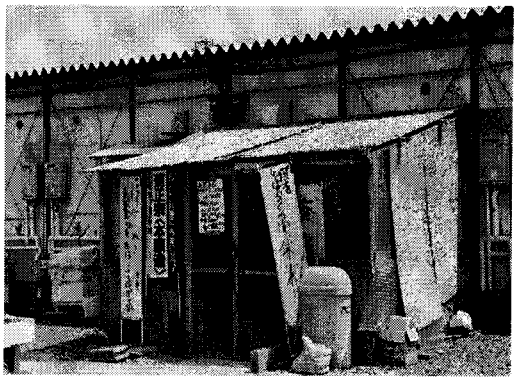
・「くらし」 →食生活および日常行動を維持するものとしての資源

買い物ツアー、移動市場、病院への送迎（午前・午後それぞれに配車）

ミニデイサービスの実施→現在の「生きがい対応型デイサービス」の源流を作った（介護保険制度以前）

仮設住宅は植栽が一杯＝隣近所の顔あわせの場

仮設住宅にこんなお店が・・・



石造りの階段や手すりはボランティアの手作り

仮設住宅での喫茶

- ふれあい喫茶　　6日間／週
  ふれあいセンターにて
- 1日平均70～80名の利用
- 効果
  仮設住宅内のコミュニティの創出に大きな役割りを果たした
  仮設住宅解消後も、住居が神戸市内に分散して住まう被災者同士の交流が続いている

ふれあいセンターの喫茶でカラオケを楽しむ人々
ボランティア手作りのオープンカウンター

ふれあいセンターの喫茶はいつも大賑わい
金曜日を休業日としてそれ以外は毎日営業

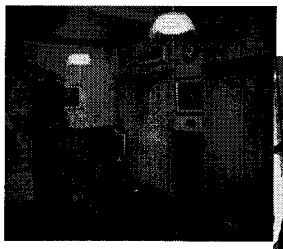
仮設住宅での小規模グループハウスからコンビニ福祉までの経緯

仮設でのグループハウスの展開

- 第7仮設住宅において、1060所帯、1800人が居住していた。そのうちの60歳以上が9割で、85歳の独居老人は450人であった。
- その中には、認知症、盲人、難聴の方もおられた。母親と二人暮らしをしていた息子が、母親に虐待をしたことをきっかけにして、グループハウスが設立された。

小規模グループハウスの実践

仮設住宅内に8所帯用のグループハウスを開始する。
ここで、「くらし」を共にする、24時間態勢での生活が始まる。



オープンを祝って餅つき

コンビニ福祉

阪神・淡路大震災は、高齢者に直接的な被害をもたらした。震災は、独居高齢者、虚弱高齢者の人権問題を顕在化した。

コミュニティが破壊された高齢者は、会話も少なくなり、閉じこもりがちになった。時には、部屋の片隅で心を閉ざし、孤独感に陥っていた。震災で家族を失い、悲嘆にくれる人に、その人がここまで生きてきた「その人らしい生を生きられる」ために、暖かい手をさしのべようという思いが「コンビニ福祉」を導き出した。

コンビニ福祉の定義

コンビニがあると同じくらいの数と距離に高齢者・障害者が集まる「場」を提供する。そのことが、「人づくり」となり、お互いが、お互いを支え合い、「自立」と「共生」のしくみとなる。

また、それは、「あそこにいけば、誰かがいて、情報がある」と思えるような場であり、また友ができ、心も豊かになり、「明日、また頑張るんだ」と勇気を与えられるような場である。そのような思いを持つことは、更に生きるためのエネルギーになることにつながっていく。

仮設住宅解消（1999年）に伴い、一軒家での小規模グループハウスの展開

住宅街での展開

住宅街でグループハウスを展開することには、地域住民の反対の声もあった。高齢者問題は、今後の自らの問題であると、地域住民への説明を行い、「グループハウス」の展開を行った。

グループハウスと生きがい対応型ディサービスの併設

複合型の福祉を目指して、看護の視点からの展開を行った。仮設住宅の解消後、行き場を失い、身体的にも加齢が進み、外に関心が向かない人が現れた。そのような人々のニーズを見いだすために、在宅訪問を行いながら、その人の必要性に目を向けることにした。

復興住宅の初期は仮設住宅と同様のコミュニティの再構築に時間を要した。「生きがい」の一環として、「人間」と「くらし」に重点をおいて展開したのが、生きがい型ディサービスである。ディサービスのプログラムでの手芸作品の完成に、今ここに自分がいることの実感を確認をされながら、頑張って生きておられる姿は美しい

地域に与える影響

地域の中で、その人がその人らしく豊かに生きるために、「住まい方」と「暮らし方」を高齢者向けに展開したことは、次のように考えられる。

これらの活動は、「助けること」ではなく、「助け合う」ことである。その中で、コーディネーターの果たす役割もまた、助けるためのものでなく、助け合うためのものである。これまでの福祉は、この区別を徹底できずに、「助ける」ことに終始していたのである。どんな障害があっても、この「助け合うこと」を原則に実践していくことが宅老所、グループハウスなどが地域に密着していくことにつながると考えられる。

以上のように、自宅からディサービスへの通所を中心に、必要な時にはショートスティ(一時宿泊)も可能な小規模サービス拠点をできるだけ身近な地域に分散展開する手法は、より広くとらえれば、痴呆性高齢者のみならず、在宅で生活する一般要援護高齢者や障害者など、並びにその家族を支援するためにも広く応用が可能であり、今後の地域ケアシステムのあり方を考える上で重要な視点となりうるものと考えられる。

グループハウスで

グループハウスにて手芸を楽しむ

伊川谷工房の実践

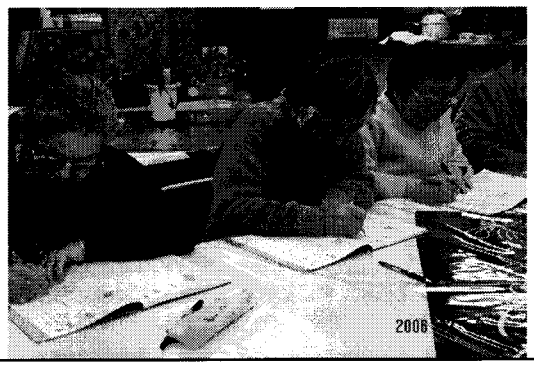
活動内容

① 生きがい対応型ディサービス
② 高齢者の仕事づくり
③ 喫茶
④ 男性用衣服の修繕
⑤ 訪問介護・看護
⑥ 入院中の独居老人の洗濯
⑦ 出張ショートスティ
⑧ 末期患者・痴呆のディサービス
⑨ 在宅介護サービス

地域周辺だけでなく、遠路からも目を向けてくださり、老人会などでも利用されている。当施設の階上に、保育所があるため、老人とこどもの交流も行っている。

生きがいデイサービスを　楽しむ人々
手芸を楽しむ

生きがいデイサービスを　楽しむ人々
ペン習字



生きがいデイサービスを　楽しむ人々
体をのばして

お正月の配食サービス

伊川谷工房で　仕事をする人々

伊川谷工房で　仕事をする人々

生きがいデイサービスを　楽しむ人々
介護予防プログラム

地域の実像（1）
1. 事例から見えた高齢者の"暮らし"

①デイサービスに参加しながらボランティアとして仕事を持っている。
⇒定期的なデイサービスへの参加が、役割を持つことになり生きがいにつながっている。

②震災で息子夫婦の所に引っ越し、友人がおらず一人ぼっちになってしまったが、デイサービスに参加して友達が増えた。
⇒震災後の移転は高齢者の"暮らし"をゼロにする。
適応能力の高い人は、自ら新しい"暮らし"を構築することができた。

地域の実像（2）

③震災の時は家から出れなかったので隣の家の人にドアをこじ開けて助けてもらった。自分の家の隣には車椅子で生活している人がいることを知っていたので消防に連絡した。・・・洋裁の仕事は震災前からずっと続けている。それがあるから今まで一人で頑張れた。
⇒"地域の顔見知り"や"仕事を通したつながり"がいのちを支えた。地域全体に広がるような共創社会を作る必要がある。

④「遠いのに（通うのが）大変ですね。」と言葉をかけると敬老優待乗車券を見せられた。
⇒高齢者を経済的に支える。
遠くてもデイサービスに参加したいという思いがある。

地域の実像（3）

⑤同じように見えるデイサービスの利用者でも、手芸（折り紙や硬筆、ゲームなど）は年齢ではなく個人差が大きい。・・・「震災で困ったことは書類が多くて自分では書けなかった」
⇒手先の動き一つでも、生活の中で困ることが増える。
ex.書類書き、ペットボトルの蓋の開閉、薬の封切りなど

⑥"年齢"でボランティアができるかどうかではなく、自分ができる事をやる。ボランティアの仲間と仕事をできることが楽しい。
⇒「自分に出来ること＝生きがい」になり、ボランティアすることが生活のリズムを作っている。

地域の実像（4）

⑦デイサービスや喫茶を楽しみにしており、一週間または一日がデイサービスを中心に生活している。
⇒楽しみを持つこと、生活のリズムを作ることがプラスの変化になっている。
⑧"高齢者"でも社会不適応の息子の世話をしている。
⇒「高齢者≠支援を受ける人」　震災は家族の問題も露呈・悪化させ、チームとして関わる必要があった。
⑨震災後、隣人と土地のことでもめた。
はがゆくて仕方なかった。
⇒震災で近所の人との関係が壊れた。コミュニティの再構築が必要だった。

地域の実像（5）

⑩ボランティア以外で近所の人（自分よりも高齢）のところへ定期的に訪問している。「待っていらっしゃるから。」
⇒「高齢者」ひとくくりではなく、人から必要とされることや、やることの意味づけが高齢者自身の健康維持につながる。
⑪「1．17灯籠」作りのために、喫茶にいつもより早い時間に出てくる。できなくてもやりたいと思う。
⇒人の役に立つことに喜びを感じている。役割を持つことの大切さ。
⑫血圧が高いので病院に通院している。しかし内服薬は「整形外科に朝一で行くから飲んでいない。」
⇒健康でありたいという気持ちを持っているが、"暮らし"と医療が結び付かない。ボランティアがかかりつけ医へ電話連絡をしたり、連絡ノートを作ることで、地域の医師にも高齢者の生活を意識させることができる。

連携の構築

・その人のニーズに合った連携のあり方

・全体を捉えて、今後に向けての連携のあり方

・10年後に向けての連携のあり方

住民にとってネットワークはなぜ重要か

・在宅医療の進化
・地域住民の複雑化と多様化
・ニーズの長期化と複雑化
・生活の基盤を支える地域ケアの必要性
・少子・高齢社会への移行

ネットワークの重要性
ー最後のひとりまでを救うー

- 社会資源
- 福祉資源
- 地縁組織

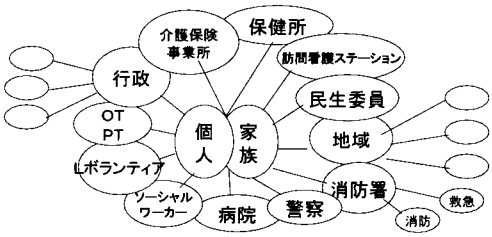
産・官・学・民の連携

医療・福祉・保健の連携

安全・安心を図るためには地域の中でどのようにネットワーク化をされているのか

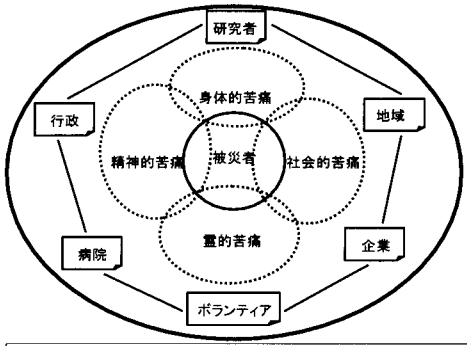
「向こう三軒両隣の活用法」
「家族・親戚の関係づくり」
「民生委員・自治組織との関係性」

情報を得た中からその人にあった支援の工夫



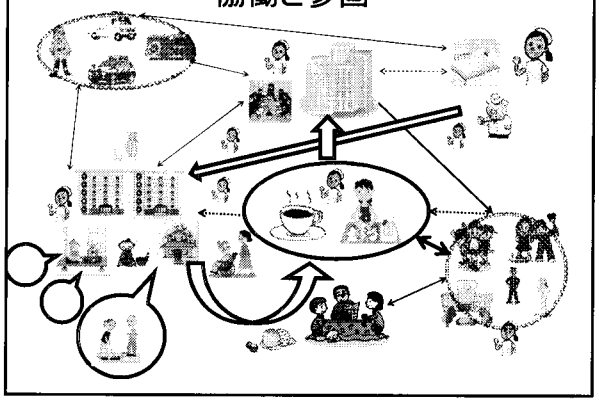
あなたの知縁とコミュニティーの地縁とをどのように結びつけながら、その人の「生きる」ことの支援をするのか、また、その人らしさを尊重したケアの展開を実践する

復興にあたって多職種のネットワークを構築



研究者としての知縁とコミュニティの地縁が連動しながら、その人らしさを尊重したケアを考慮する

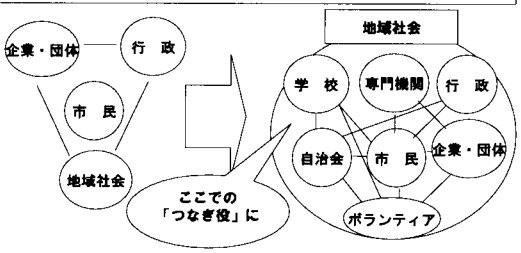
協働と参画



災害に強い地域作り

これからの地域の在りかた

「機能化」「分業化」から「地域の総合化」へ



竹の台ふれあいまつり

高齢者の活躍と不安

・登下校の見守り活動に参加する高齢者の多くは、持病を抱えている。
・パトロール基地では、健康づくりや病院情報が飛び交っている。

神戸市看護大学との連携

・19年度は、助産学学生による「赤ちゃん、抱っこ」体験。
・20年度は、看護学生が加わり、「傾聴ボランティア」で協力。

プラットホームの構築

・いつでも、どこでも、誰にでも、なんでも気軽に相談できる環境づくりの構築
（自助）
（共助）
（公助）
相談の内容を分析し次につなげる
コーディネーターの役割りが重要視される

おわりに

人間不在にならない復興を考慮するならば、平常時から防災を念頭に置き、初動～中長期にわたっての時間軸の中での復興のあり方を構築しておかなければならない。
これは様々な災害の被災地現場から学びえたことである。更に学んだことを次につなげシステム化の再構築が重要である。